

は し が き

「漁村・水産業を取り巻く状況はますます厳しくなっている」、これが常套句のように使われるようになって、どのくらいの年月が経ったでしょうか。

たしかに、燃油、資材の高騰、資源悪化など、年々厳しさが増しているものが多くあります。

しかし、海況、資源状況、魚価、環境等、すべてが悪化しているとは限りません。

例えばホタテ（標準和名：アオダイ）、これは近年、漁獲量、魚価とも上昇していますし、藻場が回復傾向にある海域もあります。また、主要養殖魚種のブリ、カンパチも一頃の原価割れの状況から、持ち直しつつあります。

このように、状況が種々変わっていくなか、県の水産調査・研究部門を担う当センターの役割も日々変わっていかねばなりません。

最近では新聞を賑わすことの多いウナギですが、養殖生産量全国一でありながら、これまでの調査・研究は単発的なものが多く、研究者もあまり育ってありませんでした。

シラスウナギの記録的不漁と、ワシントン条約による国際取引の禁止が取り沙汰される中、国の公募型事業に参画し、第一線のウナギ研究者と意見交換する中で、当センターでも研究体制を整えてまいりました。

一方、環境や資源の長期変動や赤潮の発生予測等を行うため、長期間、継続的に基礎データを積み重ねていく地道な作業も重要であり、県の試験・研究機関として、目先の事業効果ばかりに目を向けるわけにもいきません。

今後も、継続すべき事業は継続しながら、調査・研究に対する新たな要望・必要性に柔軟に対処できる体制を整えていきたいと考えておりますので、皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成28年 3月 1日

鹿児島県水産技術開発センター
所 長 佐々木 謙介